
帰り道の彼女

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰り道の彼女

【Nコード】

N1380E

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

今日も和也は暗い夜道を一人帰路に着く。

午後の１１時、辺りは真つ暗闇に包まれていた。

その夜道を一人歩く青年、むかいだかすや向井田和也。

一人暮らしの大学生で、バイトで生計を立てている。

バイトを先程終わらせ、早足で自宅の安アパートに向かう。

バイト先と自宅までの距離は結構離れているため帰宅時間はいつも遅めだが、もう慣れてしまった。

しかし、いつも朝起きるのが辛くなるのはまだ慣れなかった。

和也は、何気なく空を見上げた。

満点の星空が広がっている。

今日のように雲が少ない夜には、よく星を見ながら歩いている。

今日はオリオン座が良く見えた。

ふと、近くのマンションのベランダで同じように星を見上げている少女を見つけた。

年齢は自分と同じくらいだろうか。

（この娘も星が好きなのかな）

自分と同じような趣味を持つ人がいて、少し嬉しかった。

和也は、再び歩き始めた。

翌日も、和也は同じ道を歩いて帰った。

その時も、例の少女は同じ場所で星を見上げていた。

彼女の星を見る眼は遠くから見ても澄んでいるのが分かった。

彼女の目には、今は何座が映っているのだろうか。

和也は、再び歩き始めた。

この時和也は気付いていなかった。
自分が、彼女に恋愛感情を抱いていたなんて。

次の日も、和也は同じ帰り道で帰路に着く。

やはり彼女は同じように星を見ていた。

次の日も、そのまた次の日も、彼女は星を見ていた。
やがて、和也は自分の気持ちに気付きはじめた。

珍しく早く帰る事が出来たある日、和也はある決心をした。
彼女の家を訪ねてみるのだ。

初めは挨拶を交わす程度で、だんだんと距離を縮める事が出来たらいいのだが・・・
和也は、彼女のマンションに行った。

狭い通路に、和也の足音が響く。

エレベーターに乗って、7階のボタンを押した。

彼女の立っているランダの位置から、7階の701号室だと前から推測していたのだ。

エレベーターが3階辺りを通過している時、和也の背中に悪寒のようなもの走った。

何だろうと思いつながらも、エレベーターはすぐに7階に着いた。

エレベーターから出ると、すぐ目の前に701号室があった。

和也は大きく深呼吸すると、インターホンを押した。

『ピンポン』と、ドアの向こうから音が聞こえた。

和也の心臓は、ここから始まるラブストーリーを期待して激しく脈打っていた。

しかし、インターホンを押したにも関わらず、ドアを開ける気配が無い。

もう一度、和也はインターホンを押した。

だが、何秒待っても返事すらなかった。

和也はドアのノブに手をかけた。

鍵がかかってなかったようですぐに開いた。

この時、向こうにあったものが事前に知っていたら、絶対に扉を開けなかっただろう。

和也の目に真っ先に映ったもの、ベランダにあったそれは首吊り死体だったのだ。

「うあああ！！」

思わず後方に後ずさりしてしまった。
その時だった。

「やっぱり、怖いよね」

部屋の隅に、例の彼女が浮かび上がった。

彼女には、何というか、生きている気、生気が感じられなかった。

和也は一瞬たじろいだ、彼女は続けた。

「私ね、1週間程前にここで死んだの」

和也は非常に驚いた。

1週間前といえば、和也が初めて彼女を見た時である。

「私、訳あってずっと前から死のうと思ってたの。けどね、あなたが楽しそうに星を見ているのを見て、私ももう少しだけ星を見てから死のうって思ってたの」

彼女の目には涙がたまっていた。

それが一粒、床に落ちた。

「けど、もう私には死ぬ以外に選択肢は無かった。だから、1週間前に、首を吊ったの」

すると、突然彼女の体が徐々に透けていった。

そして、彼女は大きな笑顔を作り、こう言った。

「初めてあなたを見た時から好きでした」

そう言い残し、彼女は見えなくなった。

和也は突然の出来事にもかかわらず冷静でいられた。

靴を脱いで上がりこみ、さっきまで彼女が立っていた場所に歩み寄った。

そこには、彼女の落とした涙の雫があった。

それを見て、和也はやりきれない気持ちに見舞われた。

和也は、彼女が成仏できますようにと、手を合わせた。

ベランダでは、彼女の遺体が月光に照らされ、夜風に揺られていた。

（後書き）

急にアイディアが浮かんでしまつて勢いに任せ1時間程で書き上げました。推敲してません（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1380e/>

帰り道の彼女

2010年10月26日06時01分発行